

釧路港では、水揚げ初日一年にない魚価の高騰で地元

力を注いできたが、「1キロ2000円では採算が合わない。この値段が続くよ



ト 排気ガス濃度の測定、無保険車両の取り締まりを行つたほか、ドライバーに適切



学級経営のポイントを解説する野中氏

釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

□上□

釧路に不思議な感覚

多感な中学生のころ、掃除に訪れたアパートの部屋で、学生が残した文庫本を手にし

書きたいと思った」。釧路東高を卒業し、裁判所でタイピストとして勤

ち、「普通に暮らすお母さん」。小説家としてのデビューは2002年。「雪虫」で第82回オール読物新人賞を獲得。07年に短編をまとめた『水平線』（文藝春秋）

短編は1週間から10日、長編は4、5カ月。夫と子どもを送り出し、パソコンに向かう。編集者の注文は、時に厳しい。長編は3作先まで内容が決まっている。ジャンルにこだわりはない。「生まれも育ちも選べない人が、どうそれを受け入れ、生

てきた道東は、全国的に見て面白いところではないかと思ひ始めています」。今後も小説の舞台は、道東が中心となりそうだ。公益財団法人釧新教育芸術振興基金（春日井茂理事長）の2012年度（第41回）「釧新郷土芸術賞」の受賞者が決まった。同芸術賞は今後活躍が期待される新進の地元芸術家に贈られている。今年度の受賞者は、釧路出身ながらその活躍のフィールドを全国に広げている小説家の桜木紫乃さん、ギター奏者の松本樹佳さん、漫画家の小畑友紀さんの3人。受賞者の横顔を紹介する。

道東は面白いところ

桜木 紫乃さん(47) (江別市)

小説家

た。原田康子の釧路を舞台にした「挽歌」。一気に読みふけた。兵藤怜子が通う図書館、幣舞橋、見慣れた釧路の街角に不思議な感覚を覚え、「いつか小説を

務。結婚し夫の転勤で網走、留萌と転居。「暇になり、娘がおなかにいるころから」小説を書き始めた。今は江別で大学生の息子、高校入試を前にした娘を持

を出版し注目を浴び、翌08年『風葬』（文藝春秋）、09年『凍原』（小学館）などを出し、11年の『ラブレス』（新潮社）が直木賞候補になり、高い評価を受け

きていくのか。どこにでもいる人を書いているつもり」だが、「私の中の釧路は、東京の人からは特別に見えるようです」と桜木さん。「どつやら自分の育つ

紹介する。

ペンネームの由来は「かつて桜ヶ岡に住んでいたから」と話す桜木さん(札幌大通公園で)

